

北海道高英研の新たな発足を慶ぶ―設立の思い出、願いなど

平成元年度副会長

副会長当時・北海道札幌北高等学校長

樋口 隆 士

この会も来年で 20 年になります。昭和 63 年度に私は札幌北高に赴任、翌年元号が平成と改まったこの年には北海道高等学校長協会の会長に選任され、内外の多くの公職をこなす多忙な毎日でした。特に前任の室蘭清水丘高校長の頃、小林純幸会長直々のお声がかり、調査研究部の特別委員会主査として発足した緊急課題「本道高校生の学力向上」は、なお協会活動の主要課題として推進、マスメディアも大きく取り上げるところとなりました。こんなわけで大通公園のライラックがいつ咲いたかもわからず、ゆっくり眺めたのは定年退職してからでした。

ここで本会の創立に貢献のあった前年度発足の北海道高等学校英語教育懇話会(高英懇)について触れておきましょう。この会は、英語出の校長、教頭等の有志が、加速する国際化の時代に対応すべく、会員相互の情報交換、親睦等を行なう場、フォーラムとして結成されたものです。その願いは本道高校英語教育の充実と国際理解教育の推進に微力を尽くしお役に立つことでした。発起人代表を経て、初代の会長に推されました(会員は 81 人)

幸い翌平成元年度、1989 年には山口茂校長が札幌稲雲高校に赴任されました。前記高英懇会員の全面的な協力により北海道高等学校英語教育研究会(道高英研)が設立され、山口先生を会長に選び、私は副会長としてお助けすることとなりました。ここに高英懇の組織と人脈が生かされました。例えてみれば、高英懇は道内高校英語教育研究等の諸活動を組織化し盛んにさせる(化学反応の)触媒となったのです。

ところで、私は札幌北高へ来るまでの 10 年は地方の 4 校で校長を務め、北海道高等学校教育研究会(高教研)の英語部会研究集会には毎回出席していましたが、当番校の校長で英語出身の方は極めてまれであることに気がつきました。それまでの指導主事 3 年、教頭 8 年を通し、少数の知人を除いて英語出の校長や教頭がどの学校におられるのかも不明でした。当時も国際交流・理解の促進は国や道の重点施策として掲げられ、メディアもやかましくくらいでした。しかし、高校教育の現場では、本道の中心であり大規模校の集中する札幌でも、その全道的活動の核になる当番校を引き受ける英語出の校長が多年に亘ってほとんど配置されていなかったのです。

当番校の校長が英語出であれば、開会の挨拶を始め万事に目配りが利き、事務局の英語科の先生方も十分な評価を得て仕事のし甲斐があると言うものです。しかし、札幌市内に英語出の校長を複数で確保するということは、簡単なことではありません。昇任の校長は僻地の小間口校がお決まりで、札幌市内に入るには更に 2 校程度の異動が必要だったのです。しかも、昇任者の年齢が高年齢化し大方は 1、2 校で定年退職となるのが実情でした。

ところが、風向きが変わってきました。昭和 42 年、学園紛争に始まる生徒指導対策からすべての教育局に若手(30 歳代後半)の高校担当指導主事が配置になり(初年度は一人、のち複数)、次いで、国際理解推進の追い風で外国人英語指導助手 AET の受入れから英語指導主事が重点配置されました。やがて、行政経験を積み更に海外研修引率により視野の広がった人材が教頭として輩出するようになりました。私が札幌入りしたのもその流れだったのです(昭和 63 年度、札幌市内に英語出の校長が一举 3 人赴任)

それまでは数少ない英語担当の指導主事すら大学へ転進するケースが続き、元来英語教員には管理職志向が少なかったこともあり、学校現場の英語出の管理職は手薄となったのです。校長や教頭は、特定の教科の代表ではありませんが、適任者がいれば教科のバランスからしても 6 分の 1 程度の数が配置されてもおかしくありません。もっとも校長は国際理解・交流に高い識見を持つと共に、学校経営が任せられる人材であることは言うまでもありません。

山口先生はまさにそのお一人でした。前任の倶知安高校では卓越した学校経営により教育活動活性化の実を挙げられ、矚目のご活躍でした。新任校でも率先垂範、明確な目標を立てられ、見事なチームワークで当たられました。英語科はもとより全教職員が火の玉になって頑張られました。先生が会長となられた高英研は英語出の校長が役員として積極的に参加、リーダーシップを発揮、教頭は幹事として先生方を激励しました。また全道を 4 ブロックに分け校長は支部長、教頭は補佐として各地の英語教育研究活動や英語弁論大会を支援、育成に当りました。

マンネリに陥っていた高教研(英語部会)は参加者が急増、活性化する(県単位では最大規模)と共に、各ブロックの活動も盛んになりました。財政難で行き詰まっていた英語弁論大会が梅津奨学院に絶大な資金援助を頂き盛大となったのも、9地区予選から中央大会、上位2名の海外派遣まで運営に当たった高英研のおかげです。英語弁論大会については、不況のため同院が支援を下りた後、当時の高英研役員のご尽力で現在は高文連の国際交流専門部の事業として収まっています。

私自身、英語部の顧問として毎年生徒を指導、全道大会に生徒を出場させていました。当時は北大や小樽商大他が会場でした。スピーチコンテストで第2位になったK君はその英語に磨きをかけ映画評論家として活躍しています。長文の英文を自分のものとして5分間聴衆の前で話すことは素晴らしい学習効果を発揮するものです。他にも全国紙主催の英作文コンクールでは、予選選抜された生徒を引率して全国大会の高松まで出かけたこともありました。

本道高校英語教育の集大成として、各研究会、研究報告等の成果は大著「英語教育研究・北海道 北海道高等学校英語教育研究会」として初代会長在任中にまとめられました。これほどのものをよくぞ短期間に編集刊行されたものだとも感心しています。

今回、道高英研が改めて会員登録し会費財源により8月にワークショップ方式の研究会を充足させると聞き、うれしく思う一人です。新しい酒(new wine)は新しい皮袋(fresh wine-skins)に入れよとのたとえがあります。古いものに新しい酒を入れると破れ、酒も袋もだめになってしまいます。社会や時代の新しい動きを取り入れるには、従来の仕組みや運営を大胆に見直す必要があります。毎日の授業への貴重な示唆と直に役に立つスキルや知見を求めて全道の英語教員が集い学び合えるのです。研究会のHPにアクセスし研究会情報を取り込むことによって、参加できなかった方も研究会の概要を知り学ぶことが出来ます。従来ネックとされていた遠距離、離島、僻地校で教科1人勤務の会員も、ネットを通じて研修に参加できます。会員同士の学びのネットワークが広がることを期待いたします。5年に及ぶ検討を経てこの学びのフォーラムが出来たことを慶び、この会のますますの発展を祈念するものです。

8月の本会研究会、1月の高教研(英語部会)、英語科・国際化設置校協議会、中高英語教育研、高文連国際交流専門部と多岐に亘る英語教育に関する研究会や部活動の催しが、英語出の校長の学校を事務局として札幌を中心に業務を分担し、見事に運営されているのは素晴らしいことです。学校教育に当たる者は、常に授業研究と生徒理解・指導という足元を確かめると共に、10年、20年先に思いを致し、日々の研鑽を怠らないことが肝要です。会員の先生方のご健闘をお祈りすると共に、それぞれの事務局を担う先生方のご苦勞に感謝し、ねぎらいの拍手を贈ります。お世話をすることで会の企画と運営を学び、共に研修に参加し更に飛躍されることを望んでいます。

同時に、この流れを発展させ、絶やさないためにも、行政、学校それぞれの立場で次代の本道英語教育を託す人材を育てて欲しいものです。生徒の受験指導と英語のスピーチやトークの習得に同僚と没頭していた私が行政に出たきっかけも、今は亡き萩原獅郎校長先生が2年にわたり熱心にお声かけて頂いたからです。試しに受けた運輸省通訳案内業試験(英語)(通称ガイド試験)に合格した時、職員朝礼で紹介されたこともありました。20、30歳代の教員の頃に良い意味で個性的な4人の校長先生との出会いに恵まれ、お引き立ていただいたことを今も感謝しています。(平成19年6月)